

福島遺跡(IV) 東入垣地区 定留遺跡八反ガソウ地区

1998年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(XI)
中津市文化財調査報告 第23集

1999

中津市教育委員会



卷頭図版 定留遺跡調査区全景

例　　言

一、本書は中津市教育委員会が1998年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は1998年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び1998年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査団の構成は下記のとおりである。

一、調査主体 中津市教育委員会

　調査責任者 前田 佳毅（中津市教育委員会教育長）

　調査指導 賀川 光夫（別府大学名誉教授）

　小田富士雄（福岡大学教授）

　後藤 宗俊（別府大学教授）

　甲斐 忠彦（大分県立歴史博物館学芸課長）

　真野 和夫（同 調査課長）

調査事務 尾畑 豊彦（中津市教育委員会市民文化センター館長）

　田中布由彦（同 係長）

　富田 修司（同 主任）

調査員 小林 昭彦（大分県教育庁文化課主査）

調査担当 高崎 章子（中津市教育委員会市民文化センター主任）

　花崎 徹（同 技師）

一、遺物整理は岩崎弘子、中島二三恵（中津市歴史民俗資料館）が行った。

一、遺物の実測、トレース、写真撮影は、高崎、花崎が行った。

一、遺構の実測、写真撮影は、高崎、花崎が行い、金丸孝子、中島二三恵の協力を得た。

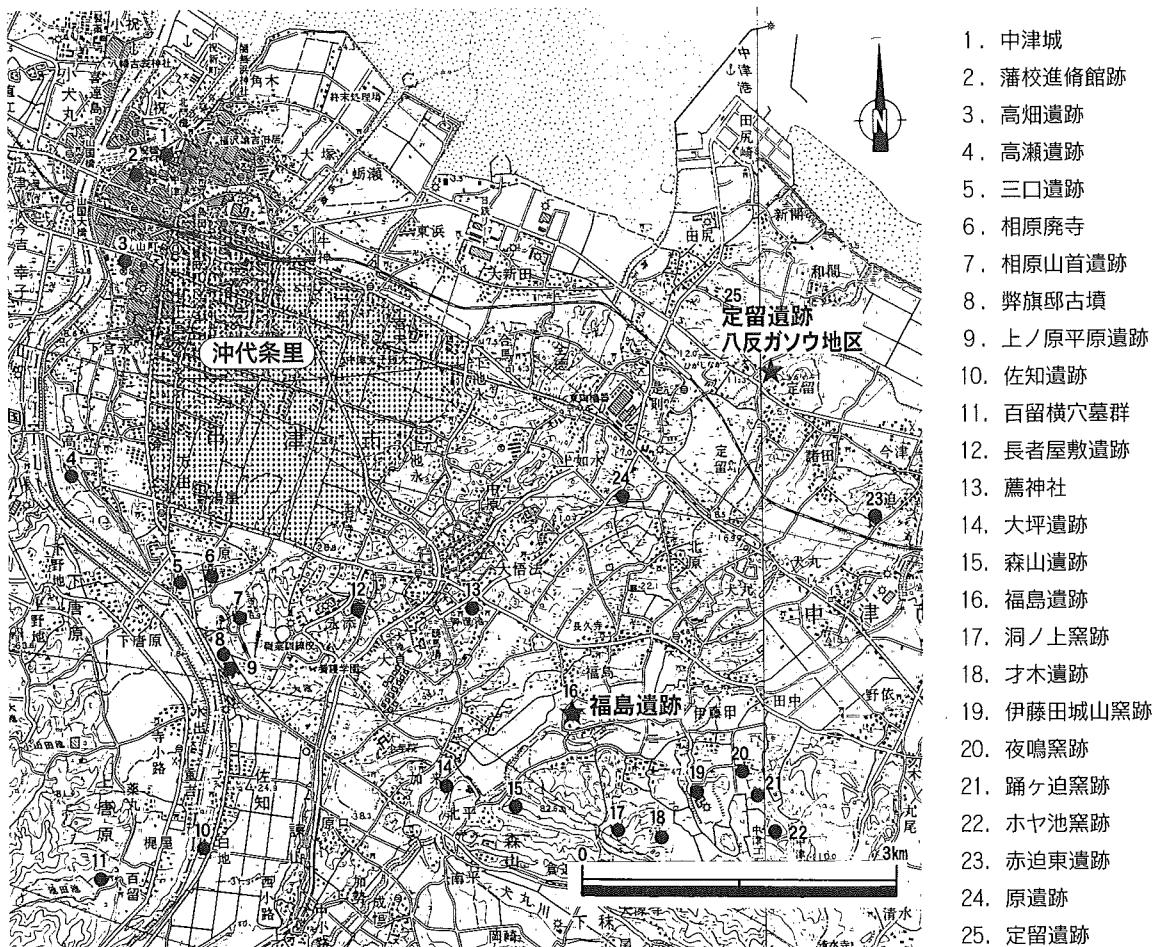
一、本書の執筆、編集は第1章・第2章を花崎が、第3章を高崎が行った。編集に当たり中野温子の協力を得た。

一、現場作業は下記の皆さんによる。

辻原 霞、寺内勝美、植山トミコ、宮崎真理、黒川みゆき、草野郁雄、黒川洋美、辛島雅美、植山京子、松本勲、植山松枝、今永キク子、植山ヨシカ、徳永賀子、田原文子、中 和代、山縣信夫、泉 貞世、岩本敏美、若木和美、中村香代子、田中トミ子、花田郁夫、塩谷絹子、石塔美代子、福山美樹、中山裕枝、水澤ミキヨ、中村香代子、新田秀勝、長岡久美子、羽良安史

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 福島遺跡東入垣地区	2
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査の概要	7
(1) 土壙 1	7
(2) 溝 1	7
3. まとめ	10
第3章 定留遺跡八反ガソウ地区	11
1. 遺跡の位置と調査に至る経緯	11
2. 調査の概要	12
(1) 谷部	12
(2) 北側丘陵	16
(3) 南側丘陵	20
3. まとめ	22
卷頭図版 定留遺跡調査区全景	
図版1 福島遺跡東入垣地区	23
図版2 リ	24



第1図 中津地方主要遺跡分布図

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北部、周防灘に面する中津市は、人口68,000人余り、市域面積55.67km²を有する。山林は極端に少なく沖代平野と洪積台地とに大別される。

中津地方の遺跡は旧石器時代から古墳時代まで主にこの洪積台地上に分布する。また近年、平野部でも開発による発掘調査で姿を現しつつある。

旧石器時代の遺跡は少なく、旧石器時代後期に属する。

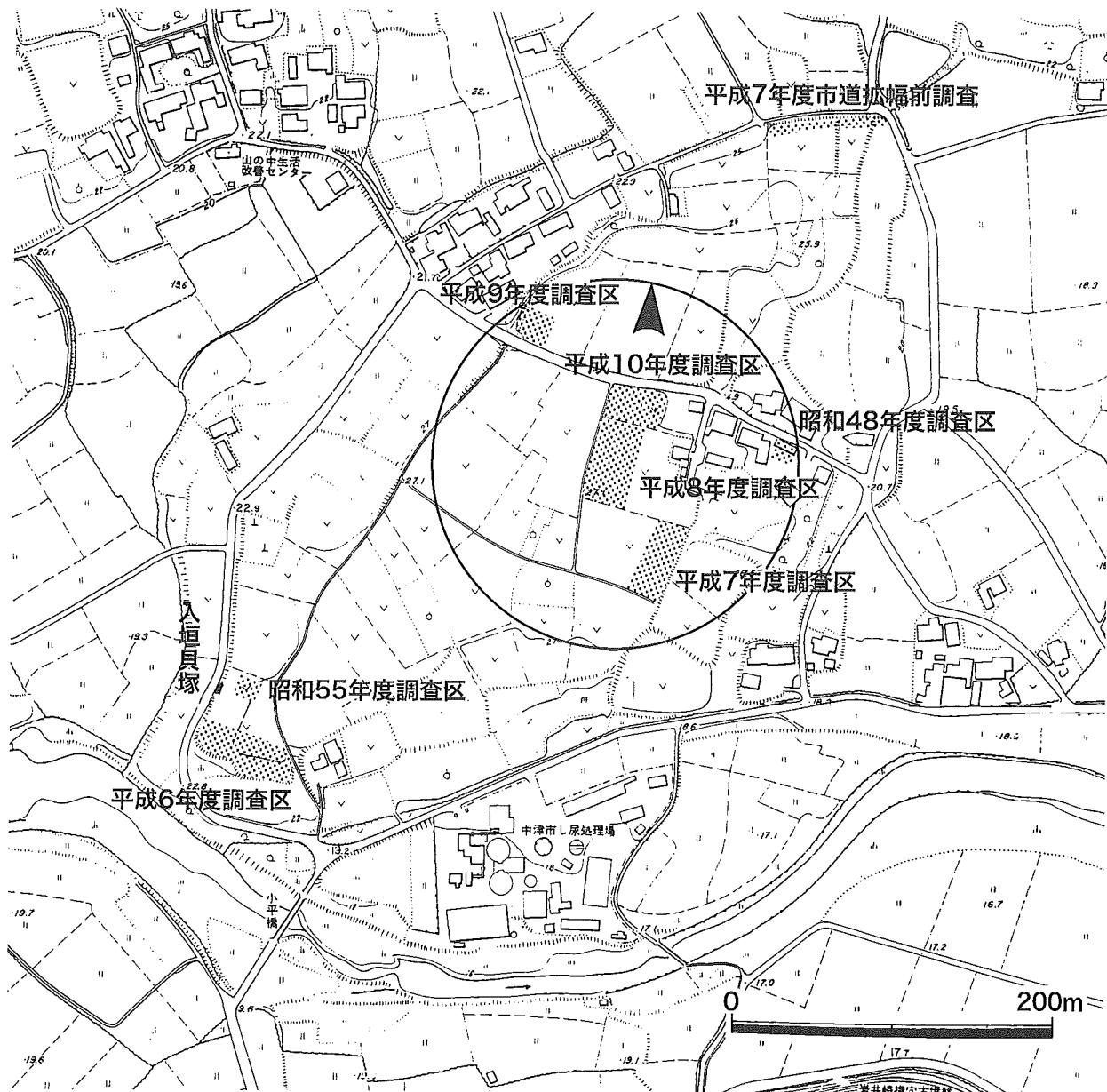
縄文時代の遺跡は、棒垣遺跡、入垣貝塚などが挙げられる。主に台地上に分布する。

弥生時代の遺跡は、福島遺跡、森山遺跡、上ノ原平原遺跡など弥生時代前期末から中期の遺跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は自然堤防上、平野部、台地上で集落が認められ、原遺跡、佐知遺跡などが挙げられる。また丘陵上には野依伊藤田窯跡が立地し、須恵器、須恵質瓦の生産が確認されている。

白鳳奈良時代には沖代平野に条里制がしかれる。長者屋敷遺跡は下毛群衙の一角と思われる。

第2章 福島遺跡東入垣地区（Ⅲ）



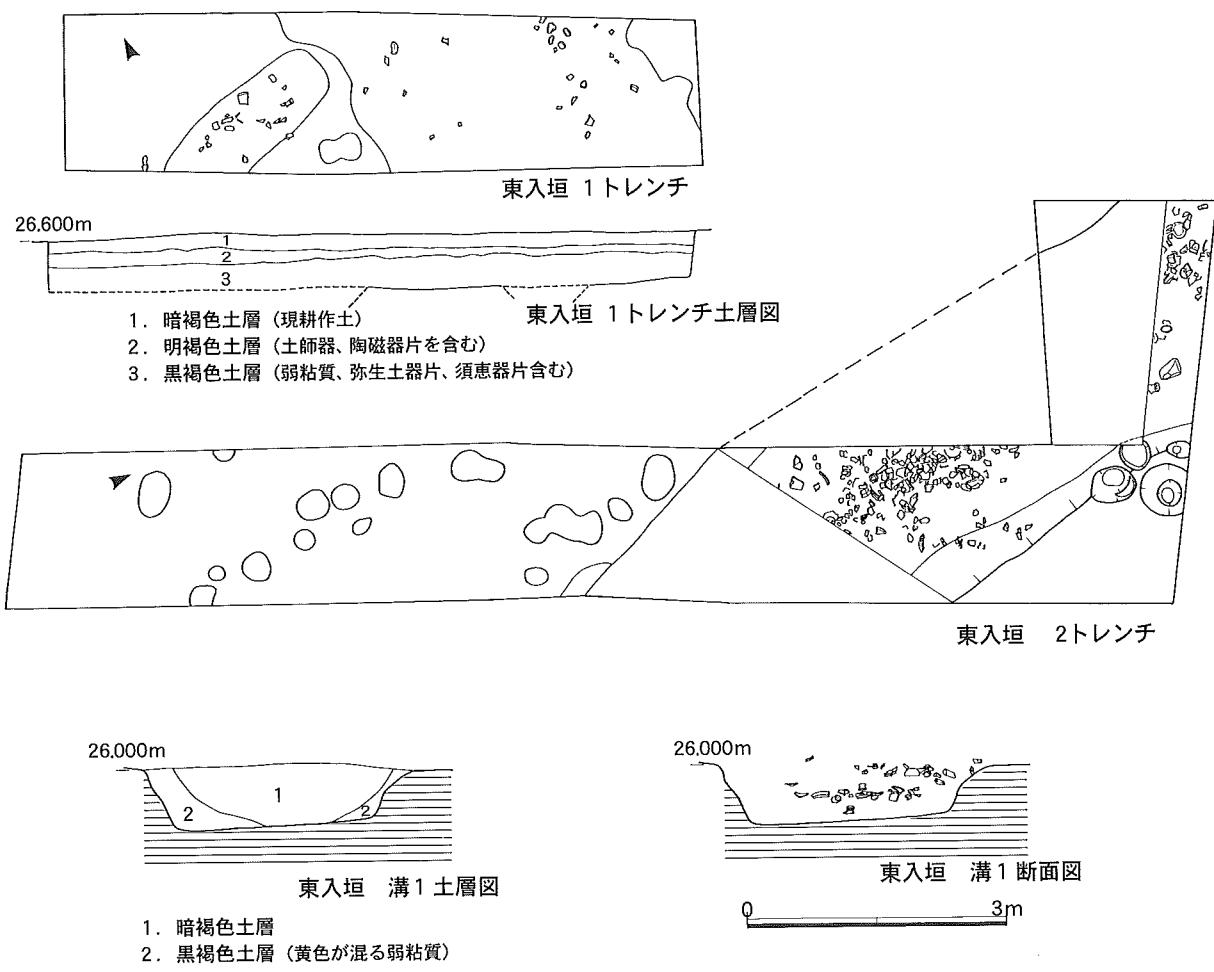
第2図 福島台地周辺地形図

1. 調査に至る経緯

福島遺跡は、標高27m程の低い台地上に位置する。台地は主に畠地であるが、近年個人住宅が建ち始め、その景観は失われつつある。昭和55年入垣貝塚で周知される隣接する福島台地上で住宅建設に伴い発掘調査が実施された。その結果、縄文時代後期の住居跡、弥生時代の貯蔵穴などを検出した。遺構は保存され、大分県指定の史跡となった。このことを踏まえ中津市では、平成6年度より周辺の畠地で遺跡の広がりの確認調査を行っている。平成7年度の調査では、調査区の北西部で溝状遺構と思われる遺構を検出した。溝からは大量の弥生土器片が検出された。この調査区の南側は、台地が落ち込むことから、北側を調査の対象とし、この溝の性格を判断するこ



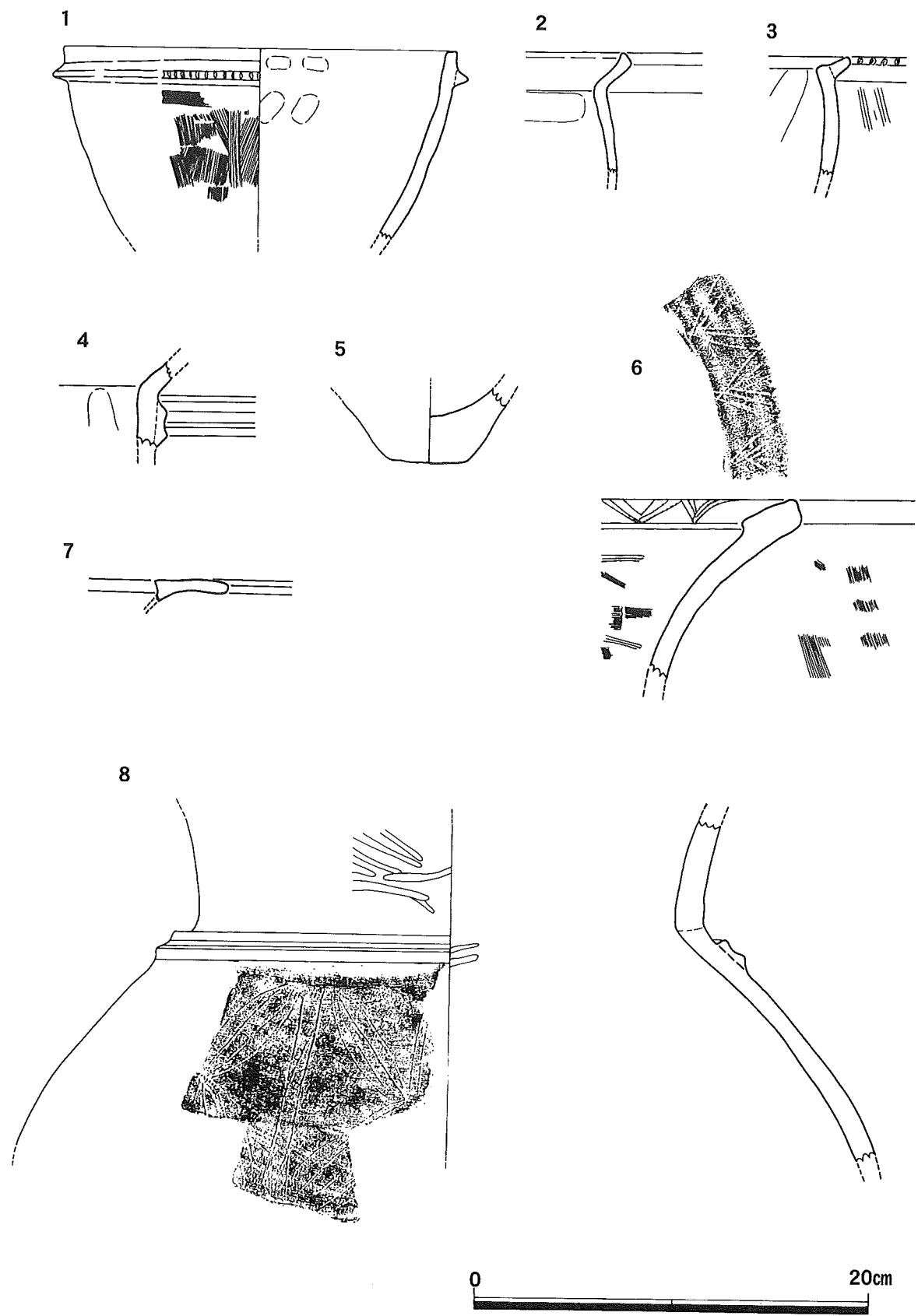
第3図 東入垣調査区遺構配置図



第4図 東入垣遺構図土層図



写真1 溝1 遺物出土状況



第5図 東入垣土壙1出土遺物

とした。平成8年度には、7年度調査区の北西部約55m程の畠地でこの溝の続きを検出することができた。この55m程の台地は宅地化により削平されており、溝を検出できたのは、大きな成果であった。平成9年度ではさらに北西に約80m程の畠地で調査を行ったが、溝は検出されなかった。しかし、弥生時代住居跡1基、土壙2基を検出し、遺跡の広がりを再認識した。そこで平成10年度は、8年度調査区の隣接する畠地に戻り、この溝の探索を行うことにした。

2. 調査の概要

調査は溝状遺構がほぼ直線に進むことを想定し、調査の北西側に2本トレンチを設定しておこなった。前回までの調査を踏まえトレンチはすべて手掘りで行った。表土より20cmは現耕作土（暗褐色土層）である。2層は明褐色のしまった土で、陶磁器片、土師器片を少量含む。3層は、黒褐色土層で、弥生土器片、須恵器片を含む。遺物出土状況から、この層より遺構は掘り込まれていると思われるが、明確な遺構ラインを検出することができなかつた。この層を除去すると、明褐色な地山となり、遺構を検出することができた。1トレンチからは土壙1基、溝1条、2トレンチからは溝1条、ピット10数個を検出した。土壙は隣接する畠まで広がると思われ、全貌は明らかにできなかつた。上層の遺物を取り上げるのみとした。溝は、前回までの続きと思われたので、一部のみ調査を行つた。ピットはすべて、検出のみとした。

(1) 土壙1

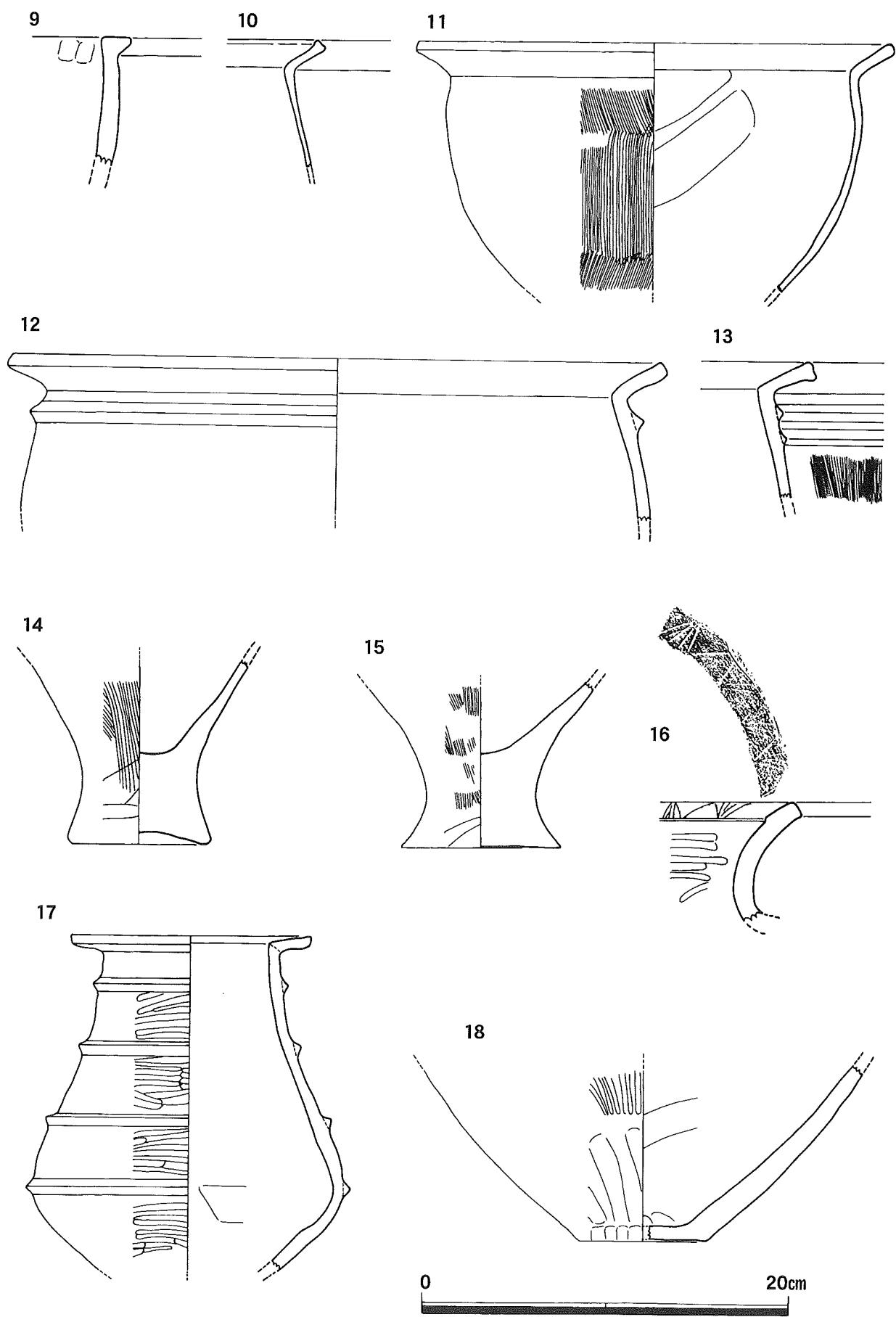
1トレンチより土壙と思われる遺構を検出した。前記したが全貌は明らかではない。南北幅に約80cmを測る。埋土は溝と同じものと思われた。

土壙1出土遺物

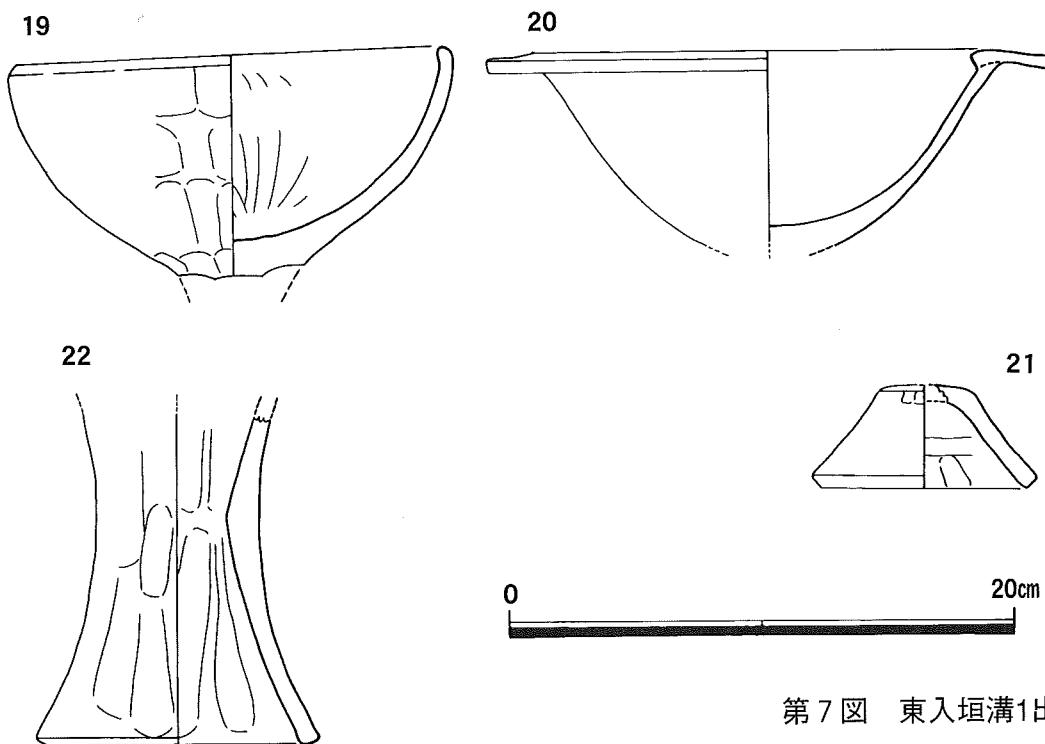
以下は土壙1の遺構ラインを検出した上層で取り上げた遺物である。1は口縁部直下に一条の突帯をはりつける甕である。突帯には刻目を施す。外面にハケ目を施す。復元口径19.8cmを測る。東九州で盛行する下城式土器と思われる。2は口縁部を『く』字に屈曲する甕である。端部を僅かに跳ね上げる。外面は摩滅が著しく調整は不明である。3は短く『く』字に屈曲する甕である。口縁端部に刻目を施す。外面に粗いハケ目を僅かに残る。4は口縁部直下に一条の『M』字突帯を施す甕であると思われる。内面は指削りを施す。5は平坦な底部片である。底径4cmを測る。内面に僅かに朱塗り痕が残る。6は口縁部を内側に張りだし方形をなす壺である。また端部内側に貝殻による鋸歯文を施す。7は高环の口縁部になると思われる。口縁部内側は僅かに張りだし、鋤先状を呈する。調整は不明である。8は壺の胴部になると思われる。胴部上方に一条の『M』字突帯を施す。外面は丁寧なミガキが施され、貝殻を用い木葉文を描いている。貝殻で2本の区画線を描き木葉文はX状に配置したと思われる。

(2) 溝1

1トレンチ、2トレンチから溝状遺構を検出することができた。2トレンチの北側で溝は北東側に曲がると思われたので、一部トレンチを拡張し溝を掘り下げた。溝は幅約300cm、深さ約60cm



第6図 東入垣溝1出土遺物



第7図 東入垣溝1出土遺物

を測る。溝の断面は逆台形で、埋土は上層が暗褐色土層、下層は黄褐色を含む黒色土で弱粘質であった。これらの状況は平成7、8年度とほぼ同様であり同一の溝であると判断した。また溝は北東に曲がると思われたが、ピットと切り合っており、さらに北へ進むと思われる。

溝1出土遺物

9は口縁部を三角形に呈する甕になると思われる。内面に指オサエ、外面は調整不明である。北九州地方の亀ノ甲様式に酷似する。10は口縁部を『く』字に屈曲する甕である。口縁端部をやや上方に跳ね上げる。内外面とも調整は不明である。11も口縁部を『く』字に屈曲させる甕である。外面にハケ目を施す。復元口径25.8cmを測る。12は口縁部直下に一条の三角突帯をめぐらす甕である。復元口径35.2cmを測る。外面は調整不明である。13は2条の三角突帯をめぐらす甕である。外面にハケ目を施す。14は甕の底部である。底径7.9cmを測る。外面にハケ目を施す。上げ底である。15も甕の底部である。底径8.9cmを測る。外面にハ目を施す。平底である。16は壺の口縁部である。口縁端部は方形を呈す。また口縁端部内側に貝殻の鋸歯文を施し、頸部にミガキを施す。17は頸部直下から胴部に4条の三角突帯を施す壺である。復元口径13cmを測る。胴部に丁寧なミガキが施される。外面に僅かに朱塗りが残る。胎土が細かく、焼成も良好である。18は壺の底部になると思われる。復元底径7cmを測る。外面に指削り、指オサエを施す。19は高坏になると思われる。口径16.6cmを測る。外面は指オサエ内面はヘラ状工具による削りが施される。胎土は粗く、焼成もやや不良である。20も高坏である。口縁部は鋤先状を呈す。復元口径16cmを測る。外面に朱塗り痕が見られる。21はミニチュア土器。復元底径6cm、器高4.1cmを測る。22は『く』字に屈曲する器台である。復元底径11.2cmを測る。内外面に指削りを施す。

3.まとめ

今回の調査の目的は、平成7年度より探索してきた弥生時代の溝の続きを検出することであった。平成8年度の調査区に隣接する畠地であったため、設定した2つのトレンチから溝を検出することができた。溝から出土した遺物は、甕、壺、高坏、器台とバラエティーであった。前回までに検出した溝からも大量の弥生土器が出土している。

甕は東九州で盛行する下城式土器、北部九州を中心に分布する城ノ越式土器、亀ノ甲様式が大半をしめる。壺は貝殻により器面に文様を施す関門、瀬戸内系のものが多く見られる。

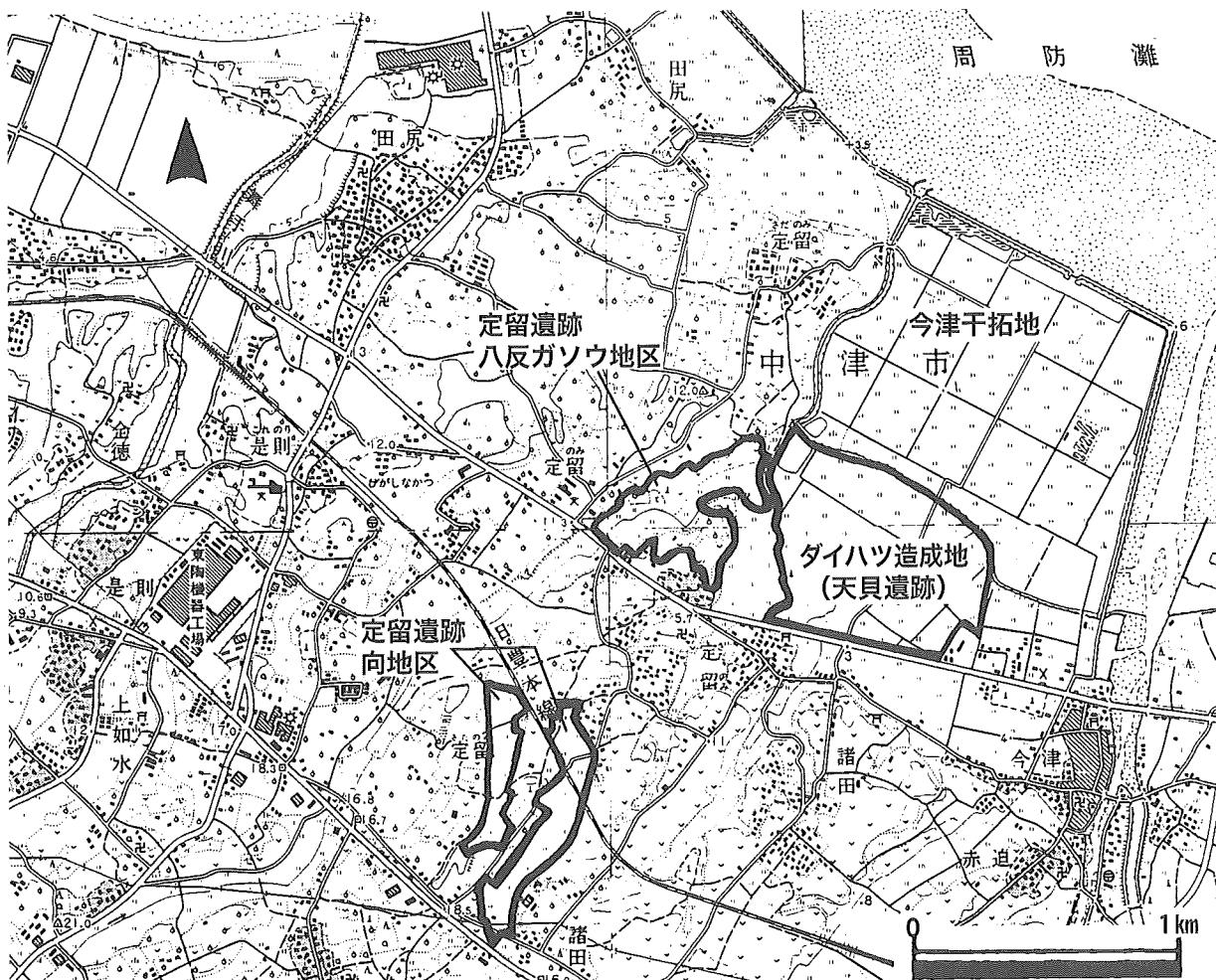
また土壙1から取り上げた土器は溝から出土した土器と同時期であると思われ、これらはセットとして考えられる。今回までの調査で明らかになった溝の全長は約100mである。今回の調査で溝は平成9年度の調査区の東側を通ると思われる。今後もこの溝の性格を明らかにするために確認調査を行いたい。

- (参考文献) 『福島遺跡入垣地区(III) 定留遺跡向地区』中津市教育委員会 1997
『沖代地区条里跡(II) 福島遺跡東入垣地区(II)』中津市教育委員会 1996
『上ノ原平原A遺跡』中津市教育委員会 1997
『台ノ原遺跡』 大分県教育委員会 1975



写真2 東入垣発掘風景

第3章 定留遺跡八反ガソウ地区



第8図 定留遺跡位置図

1. 遺跡の位置と調査に至る経緯

定留遺跡は中津市大字定留の地域一帯に広く分布する遺跡で、以前より弥生、古墳時代の遺物を包蔵する遺跡として周知されていた。

1997年度、大字定留と大字諸田にまたがり、圃場整備に伴う試掘調査を実施した（第8図）。定留遺跡向地区である。15.5haにわたり水田、畑地に重機によりトレンチを開けたが、ほとんど遺構は検出できなかった。唯一、調査区の最北端の丘陵部で、古墳時代後期の竪穴住居跡一基を検出したのみであった。遺跡はこの調査区よりも海側で展開することが予測された。

1998年5月、市内大字諸田でダイハツ工場建設予定地の試掘調査を行った（第8図）。海岸沿いの場所で、調査対照域の北側3分の2は干拓地（今津干拓地）である。調査は旧地形を留める可能性のある県道沿いの微高地にトレンチを設定した。その結果、縄文時代から古墳時代の多くの土器片が出土した。しかし、いずれも砂層からの出土で、周辺の遺跡から運ばれた洪水による遺物包含

層と判断された。これは調査区周辺に大規模な集落の存在を予感させるものであった。

今年度の調査区は1997年度調査区「定留遺跡向地区」の北方で、1998年5月調査区（天貝遺跡）の西に隣接する。周防灘の海岸線にほど近い標高約9～11m程の二条の低丘陵地（以後、北側丘陵、南側丘陵とよぶ）とその間に挟まれた標高約3～8mの谷部からなる。谷部には天貝川が西から東へ蛇行しながらのび、六反田川と合流する。天貝川の両岸は水田地帯であるが、東端の六反田川との合流地点付近では長い間休耕しており、荒廃していた。丘陵部は畠として利用されているが、南東部はやはり、雑木や竹林となっていた。

向地区北端で竪穴住居跡がでたことや、天貝遺跡で、まとまった土器が出土したことから、当地域での遺跡の存在は確実視できた。また周辺の畠では、耕作中や大水が出たときによく土器が出土するとの聞き取りができた。そのため、調査前から大規模集落の出現に期待をよせた。

2. 調査の概要

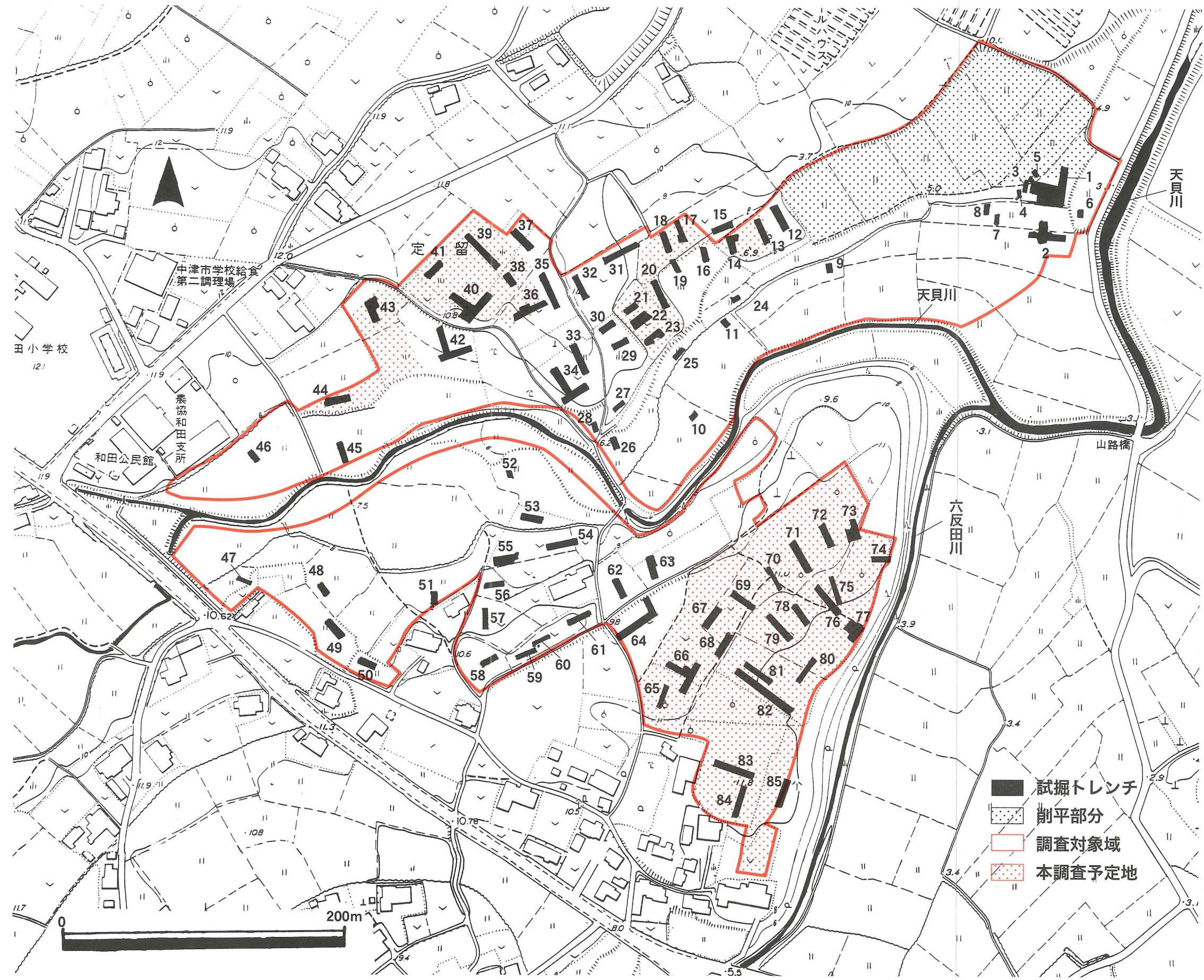
1998年10月末より工事の急ぐ調査区北東の谷部よりトレーニチをあけ、次に北側丘陵部、南側丘陵部とうつり、トータル85本のトレーニチをあけた。第9図の黒の網かけ部分は後世に削平した場所との聞き取りを得たため、調査対象外とした。

(1) 谷 部

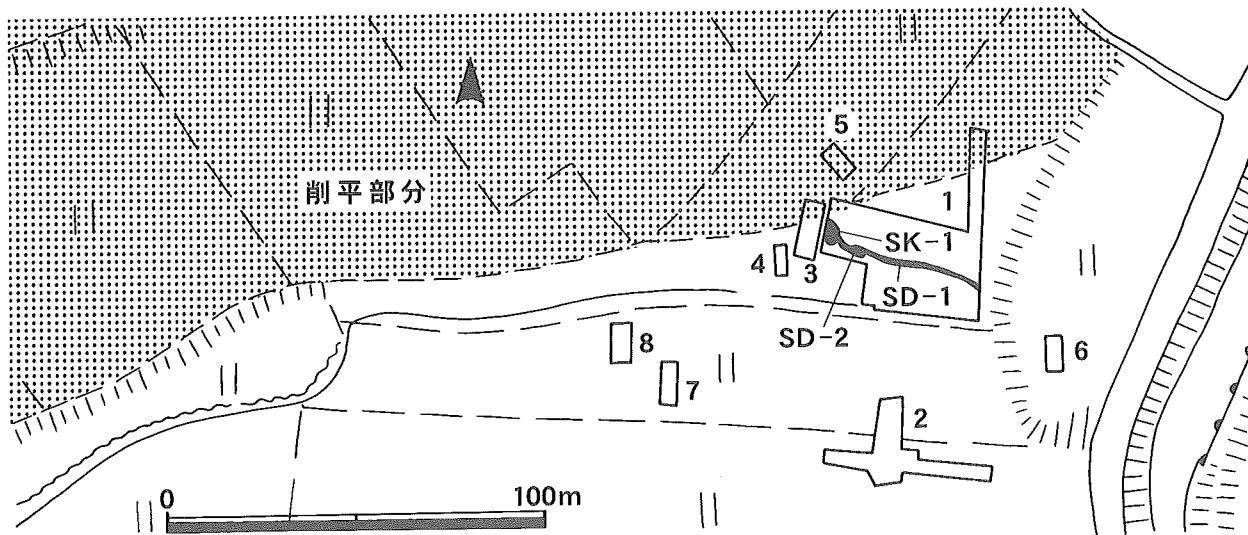
川の河口付近である調査区北東部は長く耕作が行われておらず、雑草がしげり荒廃していた。まず南北に長く第一トレーニチを設定した。地表面から約70cm下に黒色土が10cmほどの厚さで堆積しており、その下には灰色の砂層が広がっていた。砂層の下は地表から約1mで黄褐色の地山のれき層となり、水がわいてきた。灰色の砂層には、溝SD-1があり、この砂層上面が最終遺構面と判断した（写真4）。



写真3 谷部から北側丘陵をのぞむ



第9図 調査区全図



第10図 谷部トレンチ配置図

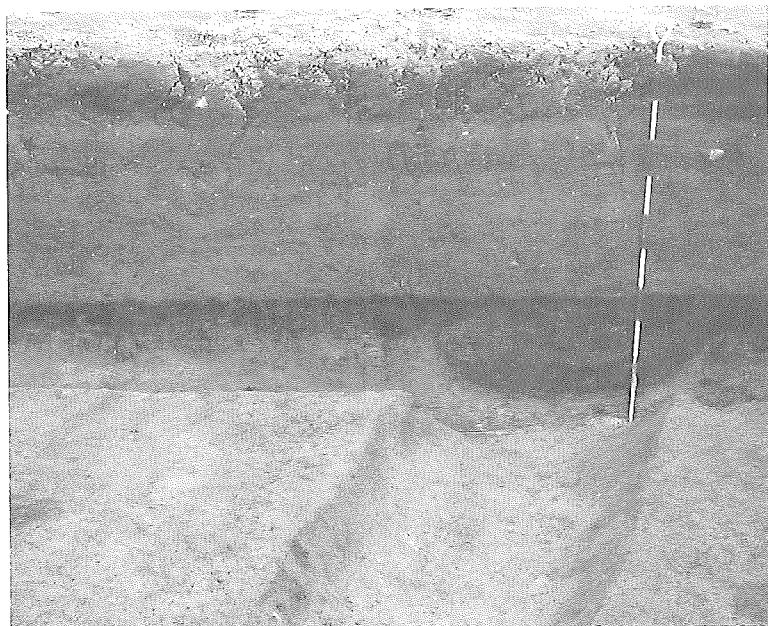


写真4 1トレンチ、SD-1 土層図



写真5 1トレンチ全景

この付近は工事が急を要しており、遺構面の範囲を確定するため、1トレンチを拡張したところSD-2、SK-1を検出した。SD-1は、幅約70cmの東西にゆるやかに蛇行する溝で、人為的に掘り込まれた水路と思われる。砂層をおおう黒色土が、古代の耕作土ではないかと推察したが、土層観察では畦の存在は確認できなかった。周囲にいくつかのトレンチをあけてみたが、遺構はおろか、黒色土の分布も確認できなかった。また、1トレンチ、3トレンチの北端で、近年丘陵部を削平した時の痕跡があり、それ以上、遺構が北へ展開する可能性はないと判断した。

1トレンチ黒色土からは6世紀後半に比定される須恵器、土師器の小片が採取できた。第11図の1、2である。1は須恵器壺蓋で、復元口径13.4cm、

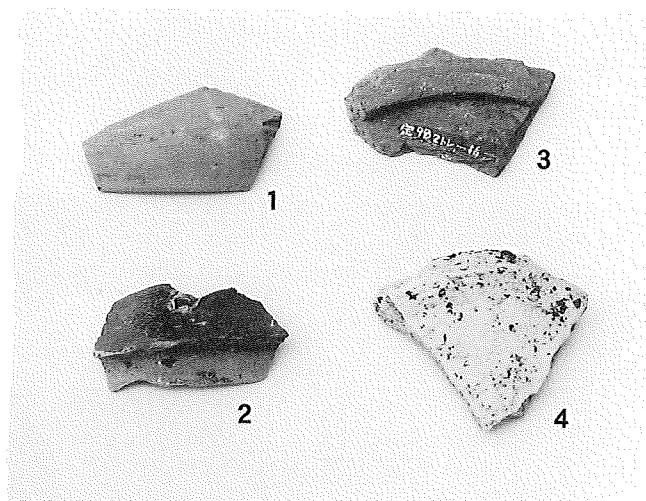
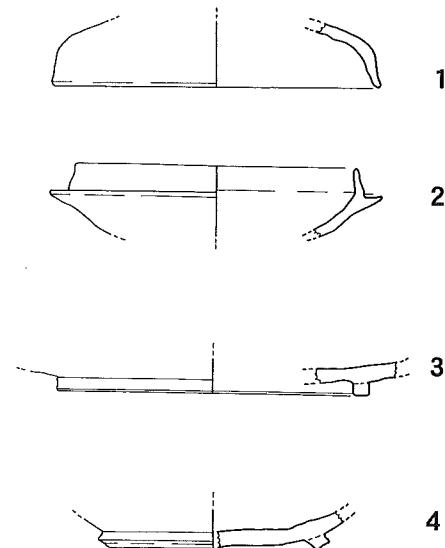


写真6 1、2、10トレンチ出土遺物



第11図 1、2、10トレンチ出土遺物
(S=1/3)

低めの天井部を持ち、口縁部近くで、強めに屈曲し下がる。2は復元口径11.5cmの須恵器坏身で、やはり浅い体部を持つ。1、2とも内外面丁寧な回転横なでをほどこす。3は2トレンチから出土した8世紀代の須恵器の高台付き椀の底部である。高台は方形で、垂直に着地し、高台径12.7cmと大型である。

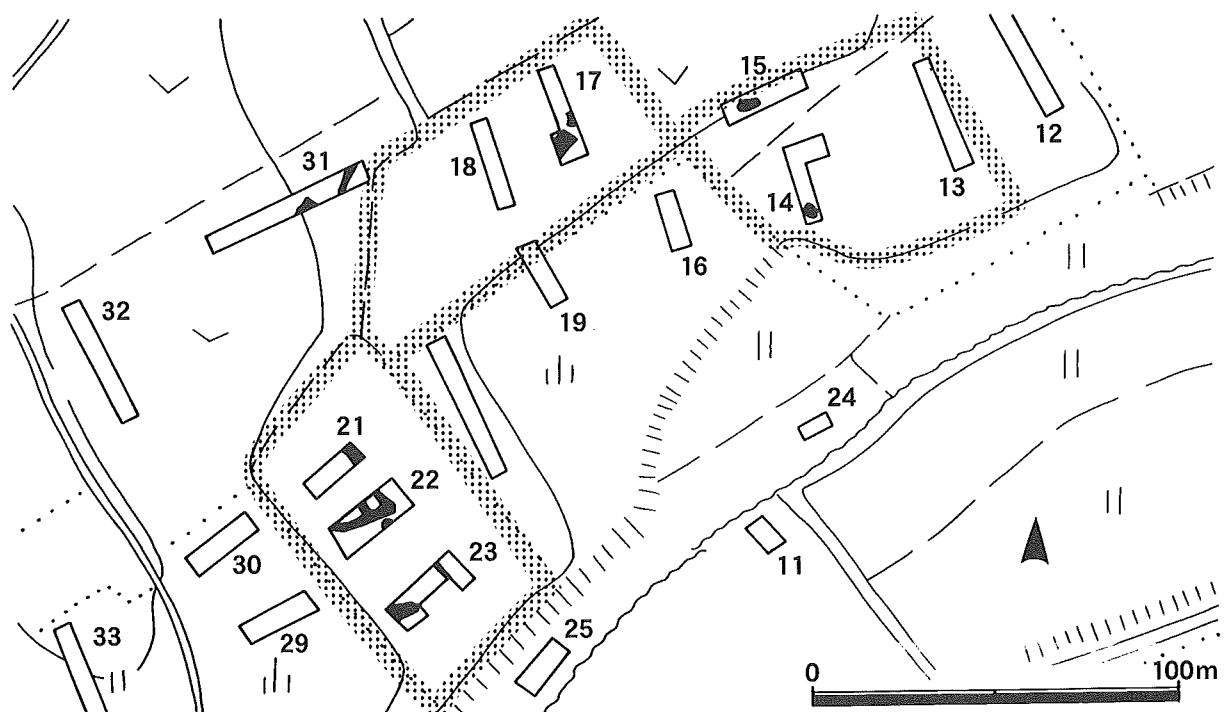
天貝川両岸の水田部では、当初古代の水田遺構の存在も考えたが、土層観察では、古代や中世にまで遡る可能性のある水田面などの痕跡は観察されなかった。天貝川の下流域である、東側では、土砂の堆積が厚く、水位が高かった。土砂に混入する遺物も東側でのみ採取できた。第11図4は10トレンチ出土の8世紀の須恵器高台付き椀の底部である。高台は小さく、外に広がっている。高台径は9.4cmである。10トレンチでは小さなトレンチの中に数点の須恵器が出土し、周辺の丘陵部からの流れ込みによるものと思われる。

(2) 北側丘陵

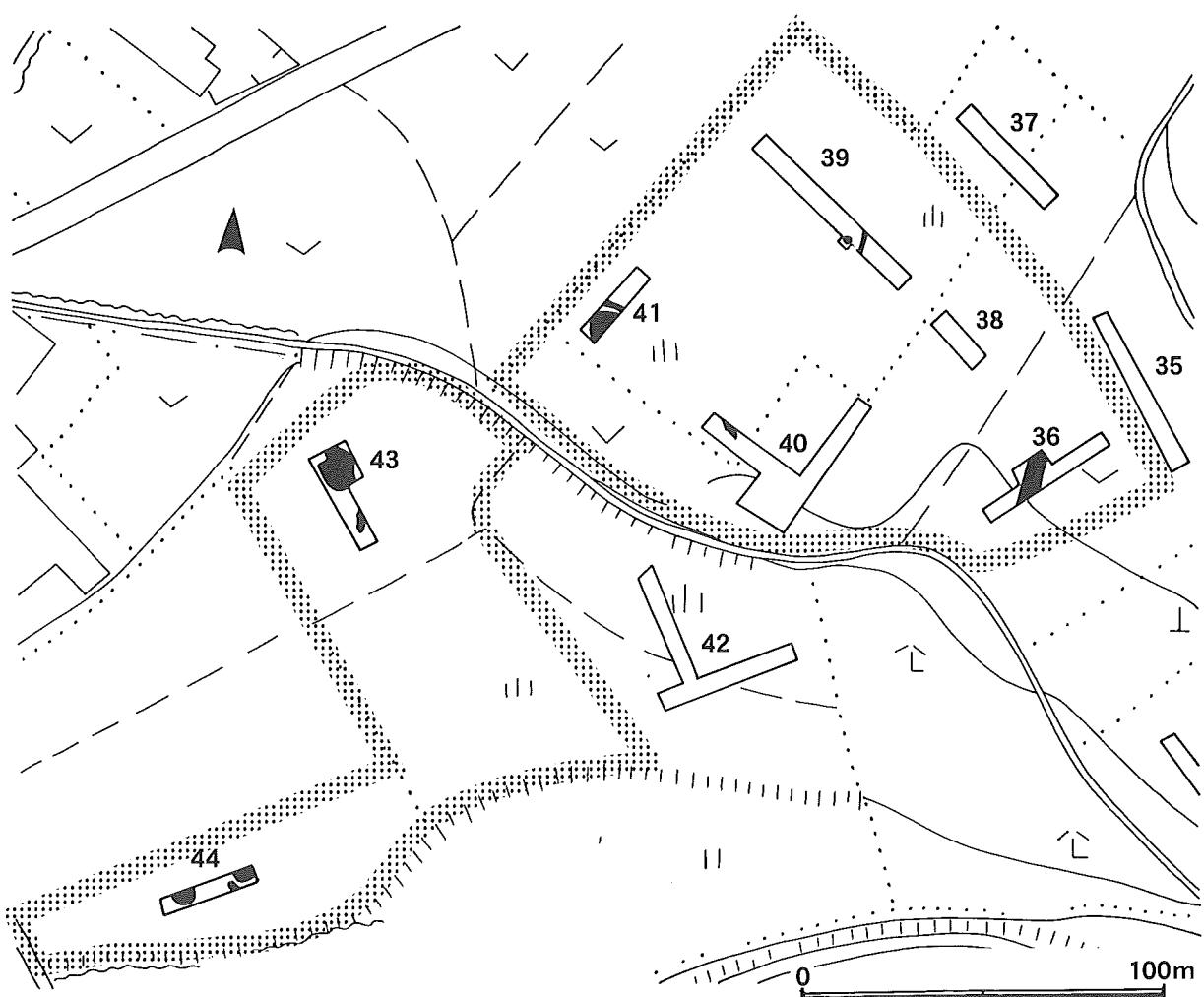
標高約9mから11mほどで、一部西端の42~44トレンチ付近を水田として利用している以外は、12~41トレンチまで畠地である。第12図では、14、15、17トレンチで土壙、ピットを、21、22、23、31トレンチで土壙、溝、ピットを検出した。これらの周囲のトレンチでは、後世の削平により、地山の礫層が露出しており、遺構は残存していなかった。遺構の密集するトレンチからは古代



写真7 36トレンチの溝



第12図 北側丘陵トレンチ配置図（1）



第13図 北側丘陵トレンチ配置図（2）

から中世にかけての須恵器や土師器、瓦器の破片が出土しており、この場所を本調査の対象地とした（第12図の網で囲んだ部分）。31トレンチは遺構が確認できたものの、工事による削平を受けないので、本調査対象地から除外した。

第14図の瓦器椀は17、18トレンチ付近から、重機による掘削中に採取したものである。復元口径15.2cm、高台径5.5cm、器高5.2cmをはかる。体部外面下半は指おさえで成形しており、指頭痕が明瞭である。小さな逆三角形の高台をはりつける。高台内にも指頭痕が残る。13世紀に比定されるものである。内外面とも口縁部をのぞき、灰黒色を程す。

第13図では、標高約11～12mの台地の上で、36、39、40、41トレンチから遺構を検出した。39、40、41トレンチの溝は幅約40cmと細いが、36トレンチの南北方向の溝（写真7）は幅約2m、深さ約0.7mと大きく、なんらかの境界をなす

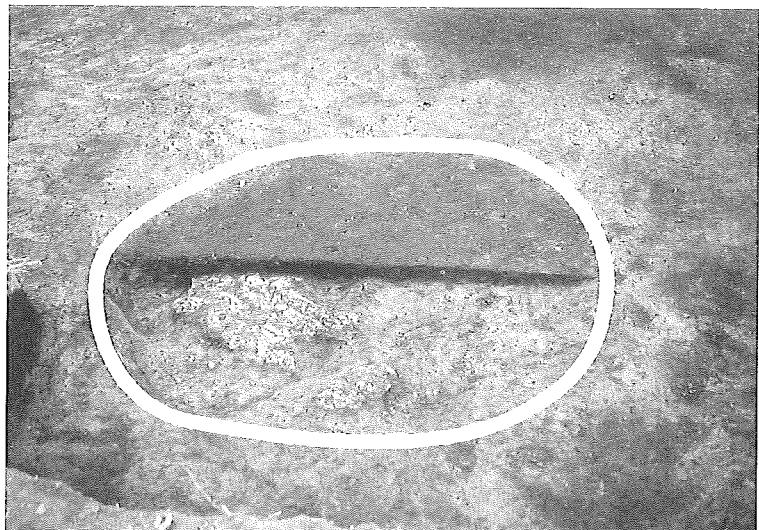


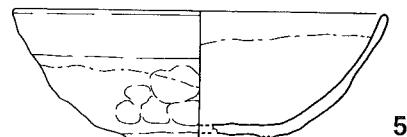
写真8 39トレンチの焼土坑



写真9 43トレンチの土坑



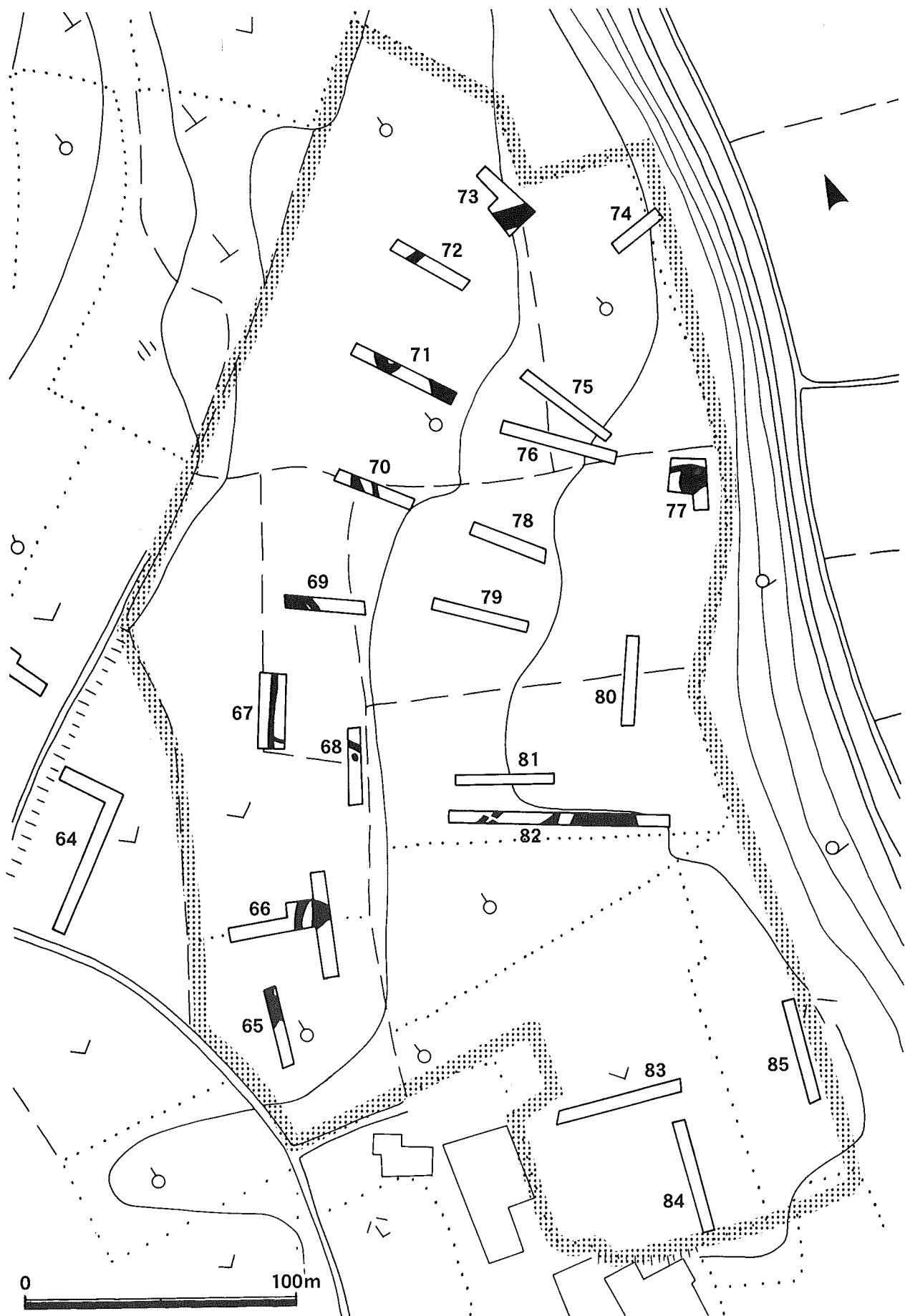
5



第14図 北側丘陵出土遺物 ($S=1/3$)

写真10 北側丘陵出土遺物

溝であろう。41トレンチからは方形の竪穴式住居跡が、39トレンチからは楕円形の土壙が検出された。台地上全体に遺構が分布していると考えられ、本調査の対象（第15図の網かけ部分）とすることを決めた。39トレンチの土壙は、半裁してみたところ、非常に浅いものであったが、床面



第15図 南側丘陵トレンチ配置図

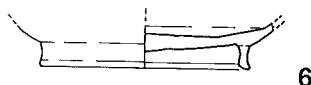
に黄白色の粘土がしがれ、炭の小片が出土、床面が被熱した焼土坑であった（写真8）。遺物は一点も出土していないため、性格は不明である。

台地の西側、標高約9mの43、44トレンチからは遺構の濃密な分布が確認された。43トレンチからは、切り合いのせいか不定形な性格不明の大型土壙（写真9）を検出した。大きめの石が数個、並んでいるような状態が観察され、興味深い。この周辺では中世の瓦器碗の破片や甕の破片、古代の土師器、須恵器の破片など遺物が多く散見できる。第13図中、網かけをめぐらしている場所が本調査の対象地で、地形が落ち込み池状になっている42トレンチ周辺は調査対象外とした。

（3）南側丘陵

標高約11mの、65～85トレンチの範囲で遺構を検出した（第15図）。その大半が溝である。65、66、

71、77トレンチからは不定形の土壙が確認できる。土壙の上面には古代の須恵器、土師器の小片が出土しているが、特に71トレンチ（写真11）には遺物の集中がみられる。第16図の土師器は高台付き碗の底部で、細めの断面方形の高台が真っ直ぐ着地する。底部回転へらきりで、高台径は8.6cmである。9世紀頃の所産であろうか。須恵器の甕の破片とともに出土している。



6

第16図 71トレンチ出土遺物
(S=1/3)

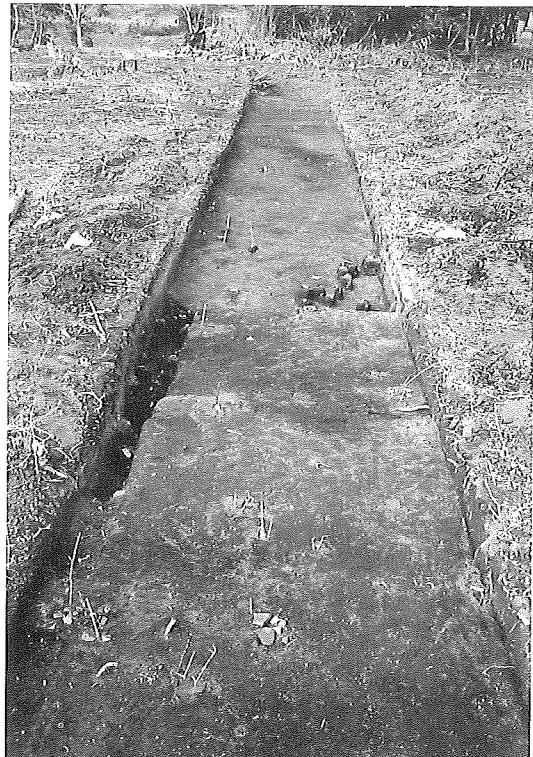


写真11 71トレンチ全景

また、南側丘陵の南東隅に、標高約11.8mと他より高くなっている場所がある。約45m×35m方形の平坦な空間で、第17図にこの場所の1/500の平板図を掲載した。方形の段上に、83、84の二本のトレンチを設定したが、遺構らしいものはみつからなかった。ここは小字名を「鯉ノ堀」といい、以前は堀がめぐっていたそうである。そして方形の高まりの部分は字名とは別に「地頭屋敷」とよばれ、「昔、守護地頭のあった時代に、地頭が住んでいた」と言い伝えられている。

また、東側の竹林跡に地形に沿うようほぼ南北にトレンチ（85トレンチ）を一本いれたところ、直径約30cmの柱穴が計11個、1.8mの等間隔でまっすぐに並んでいた。トレンチの外にものびるようで、柵列になると思われる。西側に平行して直径約20cmの小さな柱穴が並んでいる。これら柱穴

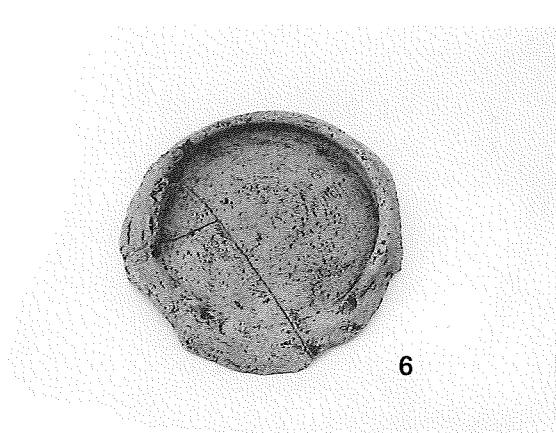
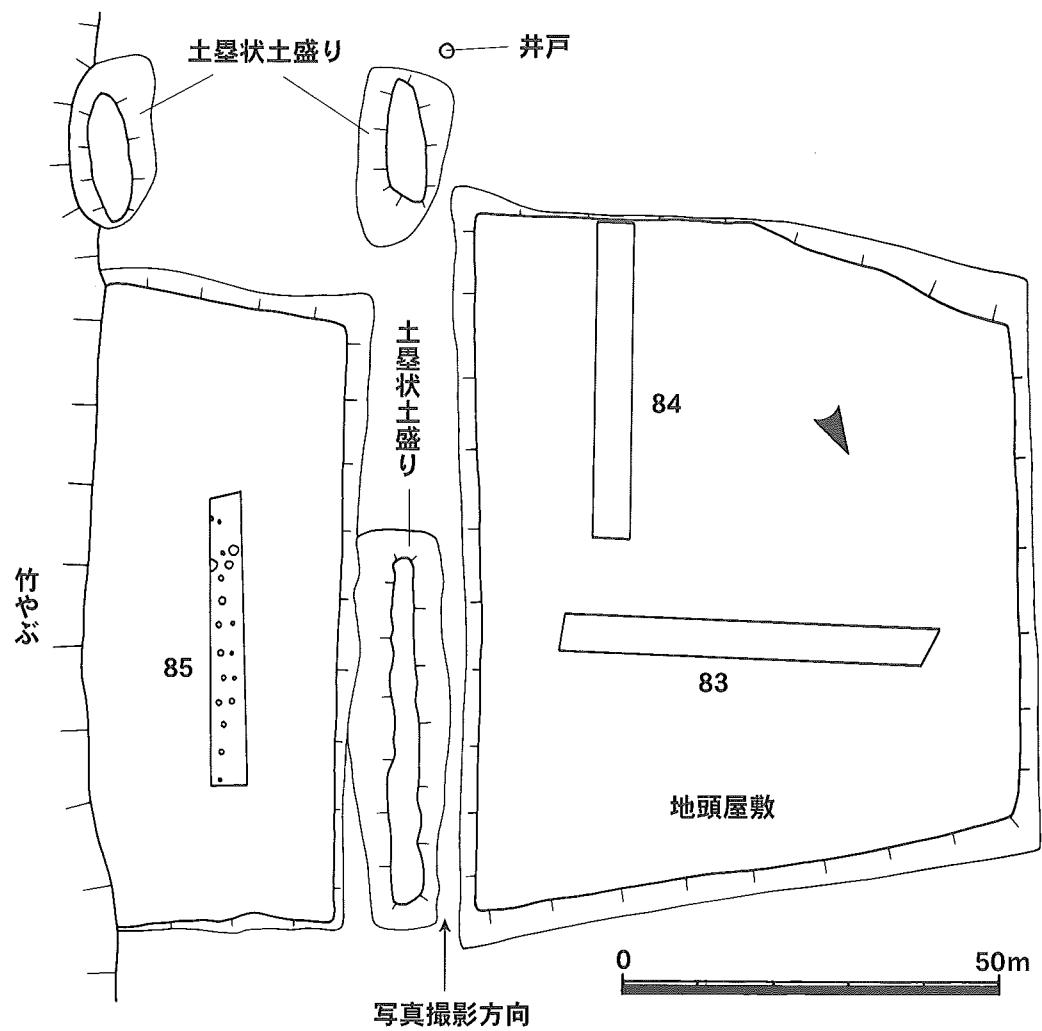


写真12 71トレンチ出土遺物



第17図 字「鯉ノ堀」地形図



写真13 字「鯉ノ堀」

の埋土は古代の遺物を出土する埋土が黒色であるのに対し、薄目の褐色で、時期差を感じさせる。また周辺には土壘状の細長い土盛りを三カ所確認できた。北側に長さ約26mのものが一本、南側に約12mのものが2本である。これら、地形の状態と地名、柱穴などから、当地に中世の館跡があったと推察される。

3.まとめ

約一ヶ月に及ぶ試掘調査の結果、天貝川沿いの低地からは、遺構が検出されず、本調査の必要はないものと判断した。唯一、水路などの遺構が検出できた河口付近は、周辺の削平が著しく、遺構の広がりがつかめなかつたのが残念である。その他の低地からときおり出土する遺物は、周辺の丘陵地からの流れ込みである。低地をはさんだ北、南の両丘陵地には古墳時代から中世にかけての遺物が散布しており、遺構も濃密な分布が予想される。当地域は海岸近くの高台であり、漁業を中心とした生業とした海辺の民たちの拠点的集落となるであろう。また調査区南東隅では中世の屋敷跡の痕跡もたどれそうである。平板図で表した場所の周囲にも、堀やテラス状の地形が確認できており、今後は発掘前により広範囲の地形測量を行う必要があろう。

本調査対象域の設定については工事による削平を受けない場所については極力対象からはずすように注意した。それでもなお、広範囲を発掘することになり、調査時には多くの貴重な資料が得られるものと期待する。



写真14 発掘風景

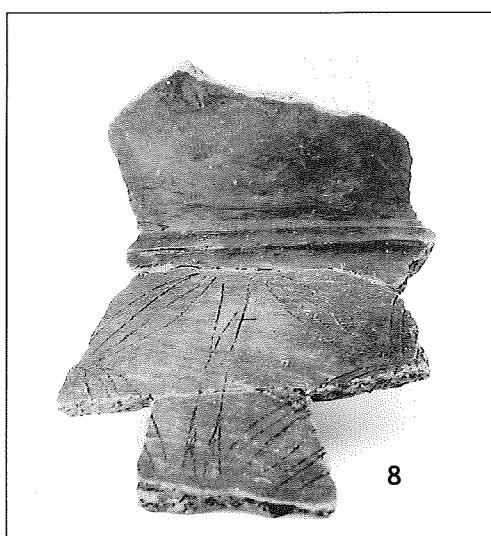
図版1 福島遺跡東入垣地区



1 トレンチ



溝1 完掘

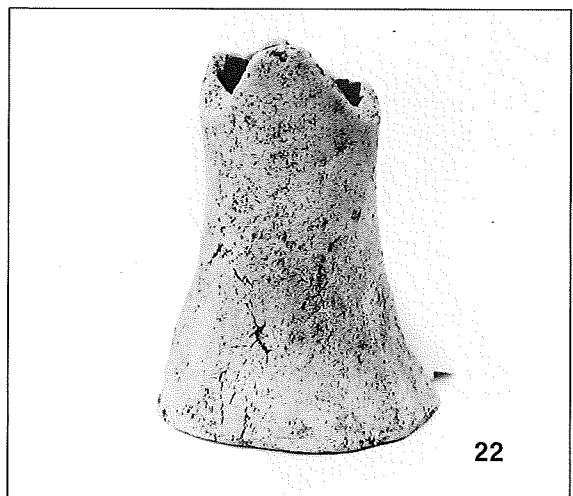
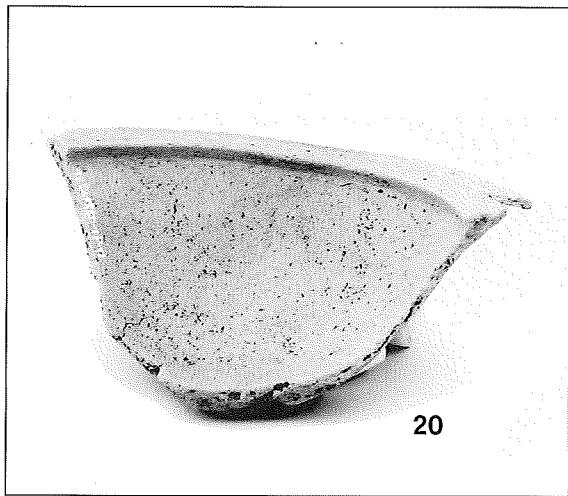
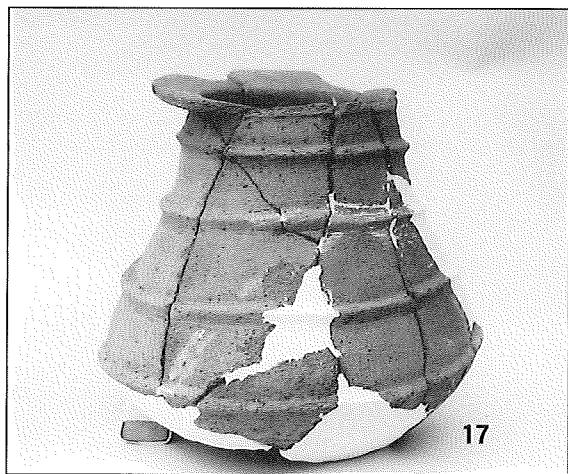
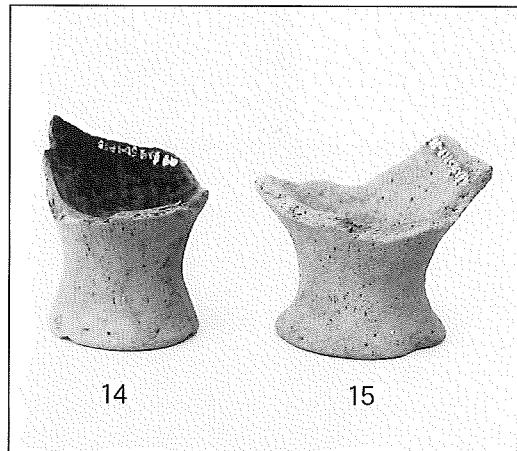
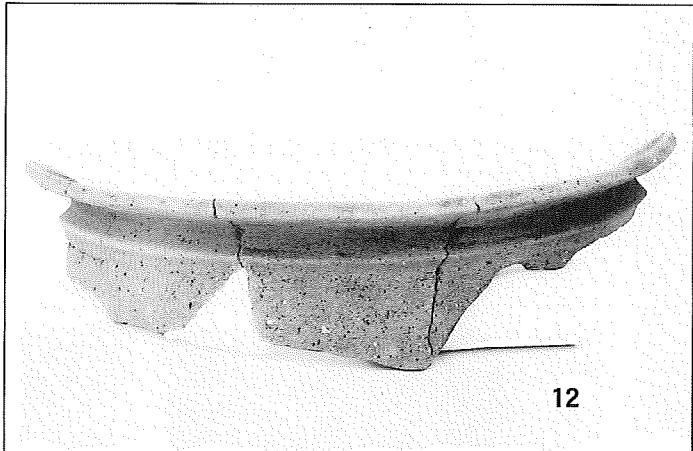


8



11

図版2 福島遺跡東入垣地区



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふくしまいせき ひがしにゅうがきちく さだのみいせきはつたんがそうちく							
書名	福島遺跡(IV) 東入垣地区 定留遺跡八反ガソウ地区							
副書名	1998年度中津地区遺跡群発掘調査概報							
巻次	(XI)							
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	高崎章子 花崎徹							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	1999年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
福島遺跡 東入垣地区	大分県中津市 大字福島1347	44203	101051	33° 33' 34"	131° 13' 50"	1998 0522 ~ 1998 0617	900m ²	確認調査
定留遺跡 八反ガソウ地区	大分県中津市 大字定留1745他	44203	101034	33° 35' 00"	131° 14' 6"	1998 1012 ~ 1998 1130	10.5ha	圃場整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福島遺跡 東入垣地区	集落	弥生時代	弥生中期の 土壙・溝	弥生土器				
定留遺跡 八反ガソウ地区	集落	古代 中世	住居・溝 居館跡	須恵器 土師器				

**福島遺跡(IV)東入垣地区
定留遺跡八反ガソウ地区**

**1998年度 中津地区遺跡発掘調査概報(XI)
中津市文化財調査報告 第23集**

1999年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 勝川原田印刷社